

【今日の説教から】

先週の箇所に続き、迫害のゆえに獄に入れられているパウロの、ピリピの教会にいる信徒たちへの熱い語り掛けが記してあります。

「あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者として、わたしの心に深く留めているからである。わたしがキリスト・イエスの熱愛をもって、どんなに深くあなたがた一同を思っていることか…」とのパウロの言葉は感動的です。

苦しみの時。しかしその中にあっても「あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」とのパウロの励ましがありました。そしてパウロは祈り続けるのです。

「あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至る…」

愛が増し加わるためにには深い知識と洞察力が必要で、それによって何がより重要なかを見つけ、それによって純粋で正直、良心の曇りのない者となり、義の実を実らせる。これはイエス様が手ずから私たちになしてくださいることであり、栄光と賛美とに至ります。私たちも神様の愛によってますます聴く、神に応答する者でありたいと願います。

皆様、おはようございます。

台風の被害はありませんでしたでしょうか。

暑い暑いと言ってはおりましたが、とんぼが飛び、夜は虫の音、朝晩はめっきりと秋めいてまいりました。そして今日から9月です。今年もあと三分の一ですね。寒い寒いという時期が来る前に、じっくりと気持ちの良い秋の季節を楽しみたいと願います。

さて、ピリピの手紙を読み進めております。獄中にいるパウロの、ピリピの教会の人たちのために思い祈る言葉が感動的です。

1:1 キリスト・イエスの僕たち、パウロとテモテから、ピリピにいる、キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、ならびに監督たちと執事たちへ。

1:2 わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

1:3 わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、

1:4 あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、

1:5 あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している。

1:6 そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。

あなたを思うたびごとに…、あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している。

困難の中にあっても、見よ、私は獄中にあっても感謝し祈っています。そして私のことを心配し、あるいは獄の中にあるからと言って自らの迫害を心配している人たちよ、自らの身に降りかかる困難を心配している人たちよ、大丈夫、「あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」から。あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝しているから。これからも神様は、あなた方を今日まで守ってくださったようにこれからも守り続けてくださるから、そして良いわざをあなた方のうちで始められた方は、これからもあなた方のうちで、あなた方の本当にそば近くで、あなた方のうちでよい業をなし続けてください、そしてそれを遂に完成させてくださるから。あなた方の信じるお方は、始めっぱなしで途中で放り投げる方ではなく、力が足りなくて途中で尻つぼみになってしまう方ではなく、確かに完成させてくださるお方だから、未来を恐れずに、どんどんと発展し、完成に導いてくださる神様に目を向けて信じ続けていきなさいとパウロは励ました。

そして今日の箇所へと続きます。

1:7 わたしが、あなたがた一同のために、そう考えるのは当然である。それは、わたしが獄に捕われている時にも、福音を弁明し立証する時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者として、わたしの心に深く留めているからである。

どうして困難の中、そのように神様を力強く信じ続けることが出来るのか。それはパウロ自身が困難の中主のお守りを体験し続けてきたからです。そしてそれを体験し、主は必ず私たちのうちに始められた良いわざを完成されると確信し、その確信をもって、常に常にピリピの教会のひとりひとりのために祈り、パウロが「獄に捕われている時にも、福音を弁明し立証する時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者として、わたしの心に深く留めている」というのです。

共にこの恵みにあずかってほしいとパウロは祈り願います。獄に捕らわれても、福音に対して強硬に反発する人たちを前に弁明するときにも、福音の良き知らせを立証するときにも、共にこの恵みにあずかってほしいとパウロは語ります。これは困難や苦痛というよりも恵みであるとパウロは語ります。

「福音の立証」とは、直訳すれば福音を確認することであり、福音をしっかりと自分自身の人生の生活に根付かせることを意味します。ここでいう福音の立証、証を立てるということは、人に伝える前に、まず自分自身がキリストの福音を自分の福音、良き知らせとしているかどうかを確認し、しっかりと自分の人生の中に打ち立てるということを意味します。

人に伝える前には、本当にそれが自分のものとなっているかどうかが問われるのではないでどうか。生半可で確信が持てないうちには、確信をもってそれを伝えることはできません。テレビの通販番組で、「みなさん、この製品はこんなに優れていて、便利で、皆さん的生活をこんなにも豊かにするんですよ」と語る人は、本当にその製品知識のことについて詳しく長けていて、その製品に心酔していなければならぬように、わたくしたちも福音を立証するにあたっては、それが本当にどのように私たちにとって良い知らせなのか、どれくらいそれが良い知らせなのかをはっきりと知識においても感情においても理解していることが望ましいのではないか。そのようにして、寝るにも起きるにもキリスト、朝にも晩にも、夢の中で寝言でもキリスト、キリストと言っているとき、私たちは良き知らせを確認し、しっかりと人生の中に福音のある生き方を建て上げ、そうして立証するのであり、それだからこそ、私たちは強硬なる反対者を前にも福音を弁明し、投獄の憂き目にあっても感謝のうちにいることが出来るのではないか。

あの「ちいしば」をお書きになった榎本保郎先生が続きまでふすま一枚を隔てて隣同士にほかの牧師と一泊なさった時、一緒に泊まったその牧師が朝お礼の言葉を榎本先生に語ったとのことです。「いやー、昨晩は私のために熱く説教を語ってくださってありがとうございました。有難く、正座をして夜中、聞き入っておりました」というのですが、榎本先生は全く記憶にありません。そのことを榎本先生の奥様も体験しており、説教はおろか、説教の終わりのお祈りまで眠りながらしているから気味が悪いわあと語っておられたとのことです。これこそが、心の奥底にまでしみいる説教者の人生、御言葉と共に生きるクリスチヤンの人生かと、びっくりした記憶があります。榎本先生は朝の御言葉が人生を変えると語っておられました。一日の初めに御言葉を頂き祈る人生、御言葉によって導かれる一日一日が人生を変えるというものです。大変に教えられます。

聖書の中にも、こういう出来事がありました。使徒19章です。

19:1 アポロがコリントにいた時、パウロは奥地をとおってエペソにきた。そして、ある弟子たちに会って、

19:2 彼らに「あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、「いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません」と答えた。

19:3 「では、だれの名によってバプテスマを受けたのか」と彼がきくと、彼らは「ヨハネの名によるバプテスマを受けました」と答えた。

19:4 そこで、パウロが言った、「ヨハネは悔改めのバプテスマを受けたが、それによって、

自分のあとに来るかた、すなわち、イエスを信じるように、人々に勧めたのである」。

19:5 人々はこれを聞いて、主イエスの名によるバプテスマを受けた。

19:6 そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した。

19:7 その人たちはみんなで十二人ほどであった。

19:8 それから、パウロは会堂にはいって、三か月のあいだ、大胆に神の国について論じ、また勧めをした。

19:9 ところが、ある人たちは心をかたくなにして、信じようとせず、会衆の前でこの道をあしざまに言ったので、彼は弟子たちを引き連れて、その人たちから離れ、ツラノの講堂で毎日論じた。

19:10 それが二年間も続いたので、アジャに住んでいる者は、ユダヤ人もギリシャ人も皆、主の言を聞いた。

19:11 神は、パウロの手によって、異常な力あるわざを次々になされた。

19:12 たとえば、人々が、彼の身につけている手ぬぐいや前掛けを取って病人にあてると、その病気が除かれ、悪霊が出て行くのであった。

19:13 そこで、ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが、悪霊につかれている者にむかって、主イエスの名をとなえ、「パウロの宣べ伝えているイエスによって命じる。出て行け」と、ためしに言ってみた。

19:14 ユダヤの祭司長スケワという者の七人のむすこたちも、そんなことをしていた。

19:15 すると悪霊がこれに対して言った、「イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ」。

19:16 そして、悪霊につかれている人が、彼らに飛びかかり、みんなを押えつけて負かしたので、彼らは傷を負ったまま裸になって、その家を逃げ出した。

悪霊に対して、イエス様の名によって出て行けと命じるというのは勇ましいですが、私たちは「イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ」などと言われないように、しっかりとイエス様に根差した信仰と思いのうちに守られ、福音が形作られる自分自身とその人生でありますようにと願うのです。

1:8 わたしがキリスト・イエスの熱愛をもって、どんなに深くあなたがた一同を思っていることか、それを証明して下さるかたは神である。

キリスト・イエスは深い熱愛のお方です。天から下り、人となられ、人のすべての罪科のために、イエス様は、神様ご自身でいらっしゃるにもかかわらず、ご自分自身が人の罪の身代わりとなって重罪人が付くべき死刑の座であり十字架に就かれたのです。これが熱愛と言

わざに何ということが出来るでしょうか。

パウロもまた熱愛の人でした。このピリピの2章で、彼はこう言っています。

2:17 そして、たとい、あなたがたの信仰の供え物をささげる祭壇に、わたしの血をそそぐことがあつても、わたしは喜ぼう。あなたがた一同と共に喜ぼう。

彼もまた熱愛の人でした。それはなぜか。それは彼がキリスト・イエスにあって生きていたからです。彼はキリスト・イエスと切っても切れない関係にありました。キリストの彼に対する熱愛によって、彼は変えられ、熱愛の人となったのです。

そのキリストの熱愛によって、彼は紛れもなく生き、祈り、愛のわざを行いました。これこそがいつまでも無くならないもの。信仰と希望と愛。その中で最も優れたものである愛です。彼はピリピの教会と、そこにいる人たちを心の底から愛していました。それを証明してくださるのは神様ですと彼は語りました。彼は神様の前で堂々とそれを、彼の熱愛を言ってのけました。その溢れる愛を持つ彼が、愛するピリピの教会の人たちに語り励ましたのがこの祈りの言葉です。

1:9 わたしはこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、

1:10 それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、

1:11 イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るようになる。

やはり彼が大切のするのは愛でした。

その愛が増し加わるのは、深い知識によって、鋭い感覚と洞察によって。それは何の知識や洞察かと言えば、11節にありますように、イエス・キリストであります。キリストを知ることこそが神を知ることであり、愛を知ることです。こうして培われるのは、愛です。キリストを知りながら愛に育たないのなら、それは不毛です。それは矛盾であり、欺瞞です。キリスト・イエスを知る知識と洞察力に満ちる時、私たちの愛が増し加わります。それによって、キリストの愛によって何事も判断する私たちには、何が重要であるかを判別することが出来るようになります。キリストにあって大切なのは愛があるかどうかなのです。

ガラテヤ 5:5 わたしたちは、御靈の助けにより、信仰によって義とされる望みを強くいだいている。

5:6 キリスト・イエスにあっては、割礼があつてもなくとも、問題ではない。尊いのは、愛によって働く信仰だけである。

5:7 あなたがたはよく走り続けてきたのに、だれが邪魔をして、真理にそむかせたのか。

1:10 それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、

1:11 イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るよう。

キリストの愛によって、何が重要で大切であるかを知り判別し、キリストのように成長することこそが純真で責められるところのない者とされる道です。そして私たちは、ただイエス・キリストによって義の実を結ばせるのです。私たちがどんなに頑張っても私たち自身では実を実らせることはできませんが、私たちは罪によって神様から遠く隔たっていたからです。しかし今はキリストにつなぎ合わせて、神様の幹につながる枝として、実を豊かに実らせるものとなりました(ヨハネ15章)。義という意味は、神様が何を望み、何が何を正しいと定められるかをも意味しますから、これは人間の側からだけでは永遠に到達できるものではないです。義という言葉は、人が規定できる正しさという概念や定義ではなくて神様との正しい関係にあるという意味なのですから。

エペソ4:13 わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

キリストの日。それは主の再臨の日、審判の日。その日に向けて、私たちは、パウロの熱愛の祈りに励まされ、私たちの愛が深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、 それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るようにと、切に祈り願うのです。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。愛にあふれた祈りにより神様が人を守り導き、キリストの愛が人に知恵と洞察力とを与える、何が大切かを発見させ、人をきよめ、責められることのない者とし、

私たちは神様のうちにあって、 自然と栄光と喜びと賛美に満ちた実り
を生み出すことを教えてくださり、ありがとうございます。どうぞあら
ゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの
家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈り
ます。アーメン